

第2部 寄稿文・記録写真





大竹組について思うこと

五藤建設株式会社 代表取締役社長 五藤 康人

建設業が冬の時代へと入って、企業が生き残るために何が必要なのかと考えていくとき、いつも私の思考の中に浮かんでくる会社がある。それが大竹組である。何代にも渡る大竹組の隆盛が教えてくれるもの。それは地域社会から、評価され、支持される企業のみが、時代を越えて存続していくということである。建設産業の本来の仕事の目的は、地域住民の生活を豊かにしていくことである。大竹組の会社の運営の根幹はここにあり、地域での大きな役割を果たしてきている企業である。一時的には繁栄できても、すぐに衰退していく企業が多い中で、まことに、世の建設業の模範となる企業であると思っている。

ところで、組織を保つのは人であるという言葉があるが、大竹組の歴代の代表者の方たちも、卓越した手腕と、すばらしい人格の持ち主ばかりである。といっても、私がお会いしたことがあるのは、先代である戎谷次郎氏と当代の戎谷一平氏である。戎谷次郎氏に私は、20代の頃、助言をいただいたことがあった。当時の厳しい時勢に的を得た氏の、一言、一言が私の大きな支えとなり、優しさとの広さを感じさせる氏の笑顔が、いい思い出となっている。戎谷一平氏には、今でもよく相談にのっていただいている。氏の先見力をもった話には、しばしば驚かせられ、今の変化の激しい環境の中で、私の会社運営の大きな指針になっているのだが、その予測の正確さは、怖いくらいである。お二人には、指導をしていただいて、たいへん感謝させていただいている。と、ともに、おこがましいのであるが、お二人を建設業界における私の目標とさせていただこうと思っている。

さて、この先、不況はますます進み、建設業者の淘汰は避けられない事態になりそうなので、私は今後の方策を立てなければならないのだが、その土台は、大竹組がずっと引き継いできた姿勢のようなものを、参考とさせてもらうつもりである。成功してきた人の手法を真似るのは、世の常道であるし、公共事業の発注

サイドが、企業に対して、地域貢献、社会貢献を評価の大きな項目に入れようとするこれからの時代に、大竹組のこれまでの運営方針は、そこで必ず高い評価を得るはずである。だから、なお良いと考えている。

大竹組は、同業者からでさえ「業界の良心」と言われる程の会社である。きっと、これからも徳島の名門として、繁栄し続けていくことは間違いないであろう。私は、これからの会社経営をしていく人たちにたいして、唯一、手本として推薦できる企業は、大竹組だと思っている。



浅川港工事回顧

元大竹組取締役工務部長 木内俊雄

大竹組は、南海地震の津波によって被害を受けた海部郡の各漁港、港湾などの災害復旧工事を手始めとして、今日まで、海部郡内の、由岐、日和佐、牟岐、海南、海部各地区の漁港工事、港湾工事の大部分を受注し、施工に携わって来たが、振り返ってみて特に記憶に残っている工事として、昭和37年度、徳島県発注の浅川港改修工事について述べたい。

海南町浅川港は、数年前から工事を進めて来た、伊勢田川右岸河口を起点とする、北防波堤の建設を終え、37年度は、対岸から南防波堤の建設に着手しようとするもので、当年度の施工延長は起点から $L = 46\text{m}$ であった。南防波堤の起点付近は広大な岩礁地帯で水深が浅く、クレーン船による基礎方塊の据付けが不可能なため、堤体工水中部分の施工にプレパクト工法が採用された。これは基礎部の岩盤を所要の深さまで掘削して基面を水平に均し、その上に型枠を組み立て、内部に先ず骨材（砂利）を投入して、あとからモルタルを注入するものである。

注入を容易にするため、骨材は最大径80mmのものを使用し、ミキサーで水・セメント・砂・アルミ粉末（水の表面張力を抑えて、流動性を高める効果のある界面活性剤）を練り混ぜてペースト状にしたものを、予め立て込み配置した鋼管を通し、高圧ポンプによって注入を行った。

これは県下でも施工例がなく、我々としても未経験の工法であったが、ちょうど当時高知県室戸漁港で、この工法による防波堤建設が施工中で、室戸土木事務所のご好意により工事中の現場を見学させて頂く事が出来た。親切にもてなして頂き、現場を案内して下さって、作業の手順や施工方法について詳しく説明を受け、また失敗や間違いをおかしやすい点についても、実例を挙げて色々と貴重なアドバイスを頂いた。その上、参考文献（手引書、マニュアル等）まで多数頂戴して、大いに感激して帰って来た。

当時は振り返って見て、今なお感謝の念を忘れることが出来ない。



大竹組45年間の思い出

元大竹組社員 岡田 好二

私の父は海軍相撲の横綱であったと言われておりました。

その血を受け継いだ為か私も高校時代は海南高校相撲部の主将として、国体や全国大会に出場しました。月日の経つのは早いもので、20歳で父が働いていた大竹組に入り、45年目を迎えました。

2人の子供も大きくなり、孫も小学生となりました。

昭和34年8月に当時大竹組の機動力は、丸岡正之さんの運転する三輪自動車一台でしたが、大型のクレーンとユンボの2つの能力を持つ重機を購入し、その運転手として任命されました。

その後、高度成長経済の中で土木工事が多くなり、機械設備も充実し、大竹組運転手仲間も増え、従業員の代表という形で牟岐町議会議員にもなりました。

戎谷利平、次郎、一平、3人の社長に仕え、45年の月日が流れ、定年を迎えたおじいちゃんとなりました。

ここで大竹組の80周年記念史の編集委員の一人として長年お世話になった大竹組の歴史に名を出した事を大変光栄に思っております。

初任給1日350円。1年に343日働きました。

結婚し、子育てをし、親として社会人としての勤めが出来たのも大竹組のお蔭だと、大竹組で働いた事に感謝と誇りを持っております。

現在の大変厳しい経済状況の中で、特に土木業界にそのしわよせがきております。

いま、大竹組もその厳しさの真ただ中におります。

ISOを取得し無駄をなくし、社会全体をスリム化し、なんとかこの難局を切り抜ける為一丸となって努力する時であると思えます。



楽しかった慰安旅行

元大竹組取締役営業部長 菊谷章良

大竹組では、会社設立以来、ほとんど毎年のように社員の親睦旅行が行なわれました。

最初の頃は、近くの讃岐の金比羅さんや高知の桂浜の一泊旅行でした。

その後、大阪城、京都の金閣寺、有馬温泉、山中温泉、白浜温泉、三朝温泉と各地の有名温泉を巡り、大阪の万国博覧会、さらに別府温泉から南九州の指宿温泉、日光東照宮と華厳の滝、白浜温泉、勝浦温泉、靖国神社参拝と富士箱根などに旅行しました。最近は回数は少なくなりましたが、それでも沖縄に行き、さらにシンガポールと外国まで足を延ばしました。従業員各位は大竹組で働いて良かったと申しております。

しかし、最近の公共事業を取り巻く環境は大変厳しく、早く、再び旅行が楽しめる様な時代を待ちたいと思います。



“大部隊”だった社員慰安旅行（昭和36年、京都・平安神宮で）

大竹組車輻部隊と野球部

元大竹組取締役工事部長 大 前 良 秋

昭和34年8月、初めて大型機械である10トン型のバックホウが購入された。

海南町松原海岸工事のため、数万立法の土砂の床掘があり、さらに引き続いてブルドーザーやタイヤショベルが入り、2トントラックが入り、大型ダンプ時代となった。

「大竹組車輻部隊」の、丸岡正之、岡田好二、喜田嘉一、三好拓司、元内実、島内国吉、杉口時夫、平間巽、久保喜則、近藤明高、正路泰夫、村本実邦、米田典行さんや、事務所の菊谷章良、大前良秋、現場の杉岡良雄、杉本茂美、山下寛、永田行雄さんなど、当時の若手を中心に野球部をつくり、徳島のプリンス自動車や町内の各チームと親睦試合を行なった。

当時の社長の戎谷利平さんが旧制海部中学校の相撲選手。また専務の戎谷次郎



大竹組野球部

(後列右から4番目が大前良秋。左端が戎谷次郎社長 = 昭和37年7月、徳島市内のグラウンドで)

さんが旧制富岡中学校のサッカーの選手だった。そのため大竹組はスポーツに熱心で、当時行なわれていた各種団体の町内運動会では得意の綱引きをはじめ各種目で大活躍をした。

永らく社長の運転手を勤めた丸岡正之さんは町内の野球の名門、大洋クラブの名一塁手として有名であった。

平成に入り、喜井義典、三浦俊夫、西山俊二、幸木光輝、浅田均二、平岡清、森口進、柴田一郎、佐藤祥弘、夏伐勇、柿久保昇、西喜亘、岡田好二、大前秋良、菊谷章良、一山稔（海南高校の選抜大会優勝メンバー）、女子マネージャー久保明美、左海りかさんたちが、よく町民グラウンドで夕方練習を行ない、休日には試合を行なったが、現在は休部状態である。

大竹組野球部ラフターズ

平成に入ると、大竹組野球部も「ラフターズ」と命名。



平成3年4月牟岐町民グラウンド



建設業の明日を思う

大竹組現場監督(当時) 喜井 義典

この文は昭和63年に、労働省、建設省、雇用促進事業団が全国募集した「建設業で働く若者からのメッセージ」に秀作で入賞した喜井義典(当時24歳)のものである。全国からの応募は761編。うち、この文など15編が同事業団のPR誌「つち」に掲載された。

「勉強しないとあんな人になるよ!」。私が入社当時に、ある道路工事の現場で交通規制用の旗振りをしていたとき、車中の女の人が小学生の子供に言った言葉です。あまりにも、思いがけない突然の言葉なので目の前が真っ暗になり、何度も何度も自分の耳を疑いました。夢の中の出来事であるように願いましたが、まぎれもなく現実のことでした。我にかえり、悔しさに耐え、作業を続けながら、しみじみとこれが建設業に対する社会の認識なのかと思ったものです。

建設業に従事し、私たちは一生懸命働き、社会に役立つようにと頑張っているつもりです。しかし、この出来事からも分かるように、世間の目は残念ながら好意的とは言えないようです。土建屋、土方、世話役、下請などの言葉は、差別的な響きを感じられます。しかし建設業自体にも、自らがイメージを悪くしているような状況が多々あるように思われます。建設業界が請負を基にしているため、創意工夫の意欲に乏しいことや、技術力が十分に評価してもらえないこと、権限の委譲が少ないことなどにその原因があります。

建設業のGNPに占める割合が10%を越えながら、公共工事が景気対策用のみ重要視されているくらいがあることや、他業種に比べ技術(施工技術など)の進歩が遅いことなども、産業界における建設業の地位を低くしているように思います。

仕事に季節的変動があることや、週休2日制などに代表される労働条件の改善

がなかなか進んでいないこと、労働災害が比較的多いこともあります。これでは社会的評価は高まらず、産業界の日陰の部分へ押しやられる心配があります。また、今でさえ建設業労働者の高齢化が言われているのに、ますます拍車がかかり、若者の就職希望も減る心配があります。このように建設業の現状を思いめぐらしてみると、ため息が出るような状態、消極的にならざるを得ないような事実が多くあります。しかし視点を変えて、冷静に社会を見つめてみると、このように嘆いてはられない、せき立てられる気持ちになります。建設業界に期待されること、解決しなければいけないことがいっぱいあるからです。

道路事情に目を向ければ、交通渋滞が依然として解消しておりません。道路に原因する交通事故も多く発生しています。先日も私の毎日利用している国道が雨のために交通遮断になり、一般交通はもとより、生鮮野菜や魚介類の輸送も急病人の移動も不可能になったことがあります。道路が整備されることによる時間的短縮は言うにおよばず、燃料費などの物的節約も資源小国である日本にとって、大きな福利をもたらすことは明らかです。

現在私は漁港建設の仕事に従事していますが、この漁港ではごく小さな台風の余波ですら、港に漁船を係留することができず、10キロメートル以上も離れた港へ避難しなければなりません。住民の願いは台風時でも係留できる港の1日も早い完成です。また一般に高齢化の進む漁村では、一般の釣り人も利用する漁港において、使いやすい安全な港が社会的にも必要とされているように思います。そのほか、河川のはんらんや土砂崩れ、津波の来襲などの防災、都市再開発や公園や上下水道などの社会資本の充実と、課題がいっぱいのように思います。

このように、ややもすると前近代的で暗いイメージを持たれる一方、各方面から期待もされているという建設業に対し、私には日頃から心に強く焼き付き、離

れない思いが3つあります。

まず第1に建設業の醍醐味を関係者、特に若い者が知ることです。建設業に係る者は、常に各人の技能の向上を図り、研鑽を積みながら、各人に与えられた職務を全うします。このとき全く同じことを繰り返すことは皆無であり、常に新たな気持で取り組まねばならず、創造性が要求され、個性が十分に発揮できます。その過程においては多くの人の協力を依存することが強いため、広い交友関係が生まれます。仕事において個性が発揮でき、交友関係ができることはほんとうに素晴らしいことです。またわずかの図面をもとに、何も無かった所に雄大なものを構築し、完成したときの気分は格別です。そしてこの構築したものが多くの人に役立つ姿を見れば、これこそ男のロマンを感じさせられます。

続いて第2に、建設業に対するビジョンを各人が持つことです。建設業は地域社会の発展や経済興隆の礎となり、また都市の新構想や再開発という、大がかりなプロジェクトを推進することが目標です。各人の立場によってこの目標は分かれ、具体的なものになり、より身近なものになるでしょう。私の現在の立場は、整備の遅れている漁港をよりよいものに築造し、地域社会の発展に寄与することです。このような夢のある、一生をかけるに値する仕事に従事できることは、使命を強く感じると共に、誇りを感じるものです。

そして第3に、暗いイメージになっている請負制度の見直しや、労働条件の改善です。施工を考えた設計（もちろん施工業者は、発注者の意にしたがって施工をします。）や、責任施工という言葉で表されるように、施工業者に権限の委譲が行われることです。これにより施工業者は今まで以上に責任を感じ、施工上の工夫も活発になるように思います。労働条件は若者が喜んで働けるような環境づくりが必要です。具体的には、工事の発注時期や工期の見直しを行い、仕事量を

平準化することです。現状では一時期に工事が集中し、工期にもゆとりが少ない場合があります。そのため休日もろくに取れない時期があるかと思えば、逆に暇な時期も長く続きます。この仕事量にむらのあることが、労働条件の改善を妨げ、建設業界の高齢化を助長しているように思えるのです。

現在は世の中の流れが経済発展のみが唯一の価値観でなく、多様な価値観の社会に移行しています。建設業界の将来を担う私たちの使命は、自然や社会との調和を考えた社会資本の充実に全力を尽すこと、社会の要請に応えられる技術の修得に努め、日々の行動に責任を持ち、明日の建設業を支えるよう努力を惜しまない覚悟です。もし現在、冒頭の女性と同じ言葉をかけられたとするなら、「社会の将来をいささかなりとも考え、社会の礎になり、社会資本充実の一翼をになっているのは私たちだよ」と心の中で誇らしく答えるでしょう。



喜井作品が掲載された「つち」誌の特別号



封印された謎

(株)大竹組 2代目社長 戎谷次郎

この文は戎谷次郎が終生の友だった故・鎌田文作（大和機械産業社長）の追憶集「旅有情」＝平成6年刊＝の序文として書いたもの。これが次郎の最後の文章ともなった。鎌田は終戦直後、農林省徳島作物報告事務所に勤務したが、組合活動でにらまれ、レッドパージで不当に免職となり、次郎を頼った。次郎は何も聞かず、快く彼を受け入れた。鎌田は一時、大竹組に籍を置き、人事院への提訴で免職が取り消されてから復職。その後独立し、会社を起こして成功した。

昭和10年の春、旧制富岡中学校5年生の時。学生の寄宿舎で生活していた。ある日のこと、サッカー部の部長の真鍋信義先生から夕食後自宅に来るようにとの伝言があった。

私は余り気が進まなかったが、4月早々サッカー部の主将を命ぜられていたので、お伺いすることにした。玄関に入ると、奥さんと、その脇に、小学生らしい男の子の2人が迎えてくれた。富岡の「紅葉屋」の生菓子が出され、先生、私、その子供の3人で頬張った。その時の少年が文作君で、私が18歳、文作君は13歳だった。

かくして、富中では、主将と新入部員として、1ヵ年をともにサッカーに打ちこんで過ごした。それが、そもそもの契機となって、以後、お互い中味の濃い交遊をずっと長く続けることになろうとは、私も文作君も全く予想もできなかった。

私は大学卒業後、東南アジア各地を空軍将校として転戦。6年後敗戦で無事復員。家業の都合で地元で建設業を営むことになった。

そして、昭和28年頃の私は(株)大竹組の専務をつとめていた。

そんなある日、事務所の入口に「文さん」が、やって来た。「文さん、何の用事で来たんな？」と声を掛けると、小さな声で、「暫く雇ってくれませんか？」という。

そこで、事務員として早速翌日から会社に来てもらうことにした。

あの元気な文さんである。きっと深い仔細があつてのことに違いない。どんな

事情があり、どんな気持ちなのか、気にならないわけではなかった。けれども何よりも文さんが私を頼ってきてくれた、そのことだけで十分だったし、私は嬉しかった。以後文さんは仔細を語らない。私も訊かなかった。それは今や永遠の謎になってしまった。封印された謎に、私は男同志の「阿吽の呼吸」を懐かしさと共に感ずるのである。

その後彼は3年近く私の事務所で在職していたが才媛の婦人科医師、小夜さんとの結婚を機に転職することとなった。しかし、その新しい事業も建設業と関係があったので、更に永いおつき合いが続いた次第である。

ドイツの文豪シラー曰く。

不幸は不意にやって来る

平成5年の冬、別れの不幸が突然やって来た。文さんが胃癌で斃れたのである。

文さんの市民病院入院の報を聞くや、桂さん（大和機械現社長 桂孝夫氏）にお見舞いの件相談したが病状の進行が意外に速く、遂にその機会は得られずに終わった。生前、せめて一言「元気を出せ、文さんよ。」と励ましてやりたかった。それも果たせず、無言の別離わかれに終わったことはまさに痛恨の極みである。

私の対人・処世の姿勢は、どちらかといえばハード路線ではなく、ソフト路線のタイプだ。文さんの人生哲学も、「和を貴ぶ」であった。この辺りに、「同気相求む」というべきか、私たち2人の年齢差を超越した深い絆の成立・存続の要因があったのかも知れない。

月に叢雲、花に風、好漢文さんも人生のある時期には人生行路を少々行き悩んだこともなかったわけではなからう。そういう場合でも、不思議と私の意見や助言にはよく耳を傾けてくれたことが今も嬉しくなつかしく偲ばれる。

良妻は夫の冠（スペインの諺）

文さん、こんな素晴らしい追悼本が出来上がったよ。もちろん君を大好きだった人たちの友情と真心の賜に他ならぬ。だが、それも君が40年連れ添った小夜さんの愛と決断あつてのことだ。よって肝に銘じ、もって瞑せよ。

サッカーの星 戎谷次郎

(株)大竹組2代目社長の戎谷次郎は、旧制富岡中学（現・富岡西高校）当時、サッカーのスター選手として有名であった。富岡中に進んで、すぐ蹴球部の選手となり、昭和8年秋、県中等学校サッカーリーグ戦でフルバックとして初登場した。年少で小柄だが、俊敏にして的確なプレーで早くから注目され、翌年秋のリーグ戦では大活躍。富中は宿敵徳島商を倒し、麻植中と引き分け、徳島工業を破って麻植中との決勝戦に持ち込んだ。次郎は決勝戦でハーフに転じ、鮮やかな守備ぶりを展開し、ついに初優勝した。

翌秋の県内のリーグ戦争では徳島商との決勝には惜敗したが、県体育協会主催の選手権大会では徳島商に雪辱、見事、再優勝した。富中躍進の殊勲者として、当時、大会を後援した徳島毎日新聞は主将・次郎の名プレーを詳細に報じており、昭和11年に卒業する際は「名選手特集」で県体育協会から体育功労者表彰も受けた次郎を「富岡中の至宝」と称えた。

サッカーで培った次郎の人脈は広く、仕事にも生かされた。戦後、蹴球部の後輩である鎌田文作（大和機械産業社長）のように、終生深い交流を続けた人たちも少なくない。



戦前の旧富岡中蹴球部の伝説的名選手だった戎谷次郎選手のプレー。
（徳島市西の丸グラウンドで）

春選 立手選 花つ何へ

琴江川畔を去る
富岡中學の至寶

藤澤部正南 戎谷次郎君
藤澤部正南 同部 學君



ツープス

第二回少年蹴球大會
今日午前九時
徳師にて舉行

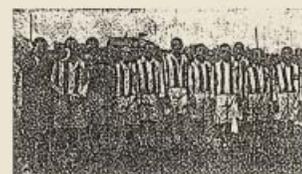
試合順序
第一部 陣容

徳島毎日 昭和十年九月九日

戎谷次郎選手（写真右）を「富岡中学の至宝」と称える徳島毎日の特集記事。

7-0 富中悠々勝つ
徳工力飛空し

援後社本
潮旗初めて阿南へ
富中の宿望遂に成る
第六回県下中等サッカー
リーグ戦盛況裡に終了す

ムーチーカブチ隊中富にし勝張

富岡中学の初優勝を報じる徳島毎日新聞（昭和10年秋）

(株)大竹組創立記念祝賀

大竹組は昭和51年に創立25周年記念の祝賀を行ったのを皮切りに、ほぼ5年毎に祝いを続けている。大竹組本社の正面玄関で社員が集まって、記念写真に収まるのが恒例だ。



創立25周年記念（昭和51年4月7日）



創立30周年記念（昭和56年4月7日）



創立40周年記念（平成3年12月13日）

大竹組OB会

（株）大竹組は創立35周年を迎えた昭和61年の9月6日に牟岐町内の家形船で「OB会」を開いた。創立以来の元社員ら32人が集まって記念写真に収まった。



前列右から、小林きくの、大田清一、西村よしの、小沢千代美、天野久子、本田としこ、猪谷さだ子、吉野かめよ、福原末子、若松いさみ、油津ゆたか。
中列右から、原秋一、久保才知、二つ亀さきえ、杉寺みさこ、山田ふさえ、長田かねこ、実川とき子、小沢よし子、和泉ひろの、戎谷一平。
後列右から、杉寺良造、賀川馬太郎、後藤喜美男、和田信一、佃孝治、戎谷次郎、菊谷嘉一、中地潔、東仁平、岡田好二、富田公平。